

世界文学全集 33

ジ イ ド
狭 き 門
田園交響楽
プルースト
スワンの恋

新庄嘉章 生島遼一 訳

河 出 書 房

世界文学全集 33 ジェイド
プルースト



© 1969

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚 富雄
中島 健蔵

昭和37年6月25日 初版発行
昭和44年11月20日 28版発行

定価 430円

訳	者	新生	庄	嘉	章
		生	島	遼	一
発	行	者	中	島	隆
			多	田	之
印	刷	者	多	田	基
			原		弘
装	幀	原			

印刷・多田印刷株式会社
製本・文勇堂製本工業株式会社

発行所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の六 会社

電話東京(292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替いたします

0397—310133—0961

目 次

ジイド

狭き門 一

田園交響楽 二五

ブルースト

スワンの恋 一七

年 譜 三六

解 説 (新庄嘉章・生島遼一) 四〇一

狭 き 門

新ジ
庄イ
嘉章
訳ド

力をつくして狭き門より入れ

ルカ伝第十三章第二十四節

主 要 人 物

ジェローム わたし、この物語の語り手。

ミス・フロラ・アシュバートン 母の家庭教師であったが、のちに話し相手の友だちとなる。

ビュコラン 叔父、母の弟。ル・アーヴルに住んでいた。

リュシル・ビュコラン 叔母。美人ではで好き、若い男と家出する。

アリサ 二つ年上のいとこ。この物語の女主人公。幼いころから、どことなくうれいをおびた、もの問いたげな少女であった。

ジュリエット 一つ年下のいとこ。アリサの妹。よろこびと健康にあふれた快活な少女で、姉の優美さにくらべて外面的に見えた。

ロベール いちばん年下のいとこ。凡庸な男。

プランティエ伯母 母の姉。ル・アーヴルの山の手に住んでいた。

ヴォーティエ リュシルの養い親。ル・アーヴルの牧師。

アベル・ヴォーティエ 牧師の四番目の息子。同年配の友人。

エドワール・テシエール ジュリエットの求婚者。のち夫となる。

ほかの人たちだったら、これで一卷の書をつくることもできたであろう。だが、わたしがここに語る物語は、それを生きたためにわたしが全力をつくし、精根を使い果たしたところのものである。そこでわたしは、ただありのままに思い出をするしておこう。そして、たといところどころきれぎれになっても、それをつくらうたり、つなぎ合わせたりするために、細工をするようなこととはいっさいしないであろう。なぜといって、そんな努力をしていたひには、それを物語ることによって味わいたいと思っている最後の楽しみをさまたげることになるであろうから。

父が死んだ時には、わたしはまだ十二にもなっていない。母は、父が医者をしていたル・アーヴルにこれ以上とどまる必要もなかったのだ、わたしの勉強のため

I

にかえって好都合だろうと考えて、パリに引越す決心をした。母は、リュクサンブール公園のそばに、小さなアパートを借りた。ミス・アシュバートンも来てわたしたちといっしょに住んだ。もう身よりもなかったミス・フロラ・アシュバートンは、はじめは母の家庭教師だったが、やがてその話相手となり、まもなく友達となったのだった。同じようにやさしくて寂しげな、そして喪服姿でしか思い出せないこの二人の女性のひざもとでわたしは暮らしてきた。ある日のこと、それは父が死んでからかなりたつてのことだと思いが、母が、朝の帽子の黒いリボンをもーヴ（葵花色）のリボンと取りかえていた。それを見てわたしは大声に言った。

「母さん！ その色まるで似合わないよ！」

翌日、母はもとの黒いリボンをつけていた。

わたしはひよわな子供だった。わたしを疲れさすまいとする母やミス・アシュバートンの心づかいがわたしをなまけ者にしなかったのは、わたしがほんとうに勉強に興味を持っていたからだ。初夏の晴れた日がやって来ると、二人は、今こそわたしのためにパリをはなれる時だ、このままだとわたしの顔色が青くなると思うのだった。そして、六月の半ばごろ、夏ごとに叔父のビュコ

ランが呼んでくれるル・アーヴルの近くのフォングーズマールに向かつてわたしたちは出発した。

ノルマンディ地方のよその庭と特別変わったところもない、さして大きくもなければ美しくもない庭にある、白い、三階建てのビュラン家の住居は、十八世紀の多くの別荘に非常によく似ていた。東の方は、庭に向かつて二十ばかりの大きな窓があいている。裏手にも、同じだけの窓がある。だが両側には一つもない。窓には小さな窓ガラスがはまっている。最近とりかえられた幾枚かは、古いガラスの間にあって、あまりにも透き通りすぎているように見える。そこでそばの古いガラスは、くもって、緑がかって見える。あるガラスには、家の人たちが《泡》と呼んでいるきずがある。そうしたガラスを透かしてみる木はひよろついて見え、前を通る郵便配達夫にはいきなり瘤ができる。

長方形の庭は、土塀でかこまれている。それは、家の前で、木陰のあるかなり広い芝生をつくり、そのまわりは、砂と小石の小道になっている。こっちの方は、土塀が低くなっていて、この庭を取り巻いている農家の庭が見える。農家は、この土地の風習に従って、ぶなの並木道で仕切られている。

家の裏手の西側では、庭はいっそうのびのびとひろが

っている。南側のエスバリエ（樹籬）の前の、花の咲きこぼれた小道は、ポルトガル産の月桂樹の厚い茂みやその他の木々のおかげで、潮風からまもられている。北の土塀に沿ったもう一つの小道は、木の枝の繁みの下に消えて行っている。従姉妹たちは、それを《暗い小道》と呼んでいた。そして、たそがれ時をすぎると、進んでそこにはいって行く者はなかった。この二つの小道は、五、六段降りてさらに低い方へ庭をつづけている菜園に通じている。それから、菜園の奥に隠し戸があいている土塀の向こう側には輪伐林があって、ぶなの並木道が、左右から来てそこでおわっている。西側の踏段からは、この林を越して、高地が見渡され、その上をおおうている農作物がながめられる。さして遠くない地平線には、小さな村の教会堂が見え、風の落ちた夕暮れには、幾つかの家から立ちのぼる煙も見える。

夏の晴れ渡った夕暮れには、わたしたちはいつも、夕食のあと、この《低い庭》において行った。わたしたちは隠し戸から出て、いくらかこのあたりの見晴らしがきく並木道のベンチにまで行った。そのの、今は廃坑になっっている泥灰石坑のわらぶき屋根のそばに、叔父、母、ミス・アシュバートンが腰をおろした。わたしたちの前では、小さな谷にも、やがたちこめ、空ははるかかなたの

森の上で金色に染まっていた。そしてわたしたちは、すでに薄暗くなつた庭の奥で、おそくまで時をすごした。やがてわたしたちは家に帰ってきた。すると客間に、ほとんどわたしたちといっしょに外に出たことのない叔母の姿を見いだすのだった。……わたしたち子供にとつては、宵の時間はここでおしまいだった。だが、よほどたつて階段を上がってくる両親の足音の聞こえるころ、まだ自分の部屋で本を読んでいることもしばしばあった。庭で過ごさない時間のほとんどすべては、わたしたちは『自習室』で過ごした。それはもともと叔父の書齋で、そこに勉強机を入れてもらったのだった。従弟のロベールとわたしは、並んで勉強した。わたしたちのうしろには、ジュリエットとアリサがすわった。アリサはわたしより二つ年上で、ジュリエットは一つ年下だった。ロベールはわたしたち四人のうちでいちばん年下だった。

わたしは幼き日の思い出話をここに書くつもりはない。ただこの物語に関係あるものだけを書こうというのだ。この物語は、まさに父の死んだ年にはじまると言えよう。おそらく、わたしの感受性が、わたし一家の喪によつて、また、わたし自身の悲しみによつて、といえねば、少なくとも母の悲しみを見ることによつてひどく刺激されて、新しい感動に準備されたのであろう。わたし

は年よりもませていた。で、その年、フォングーズマールにやつて来た時、ジュリエットとロベールは、わたしの目にはいつそう子供らしく見えたが、アリサを見ると、わたしはとつぜん、わたしたちは二人とも子供ではないことをさつたのだった。

そうだ、それはたしかに父の死んだ年だ。わたしの記憶にまちがいないことをたしかめてくれるものは、わたしたちが着いてまもなく、母とミス・アシュバートンが交わした会話である。わたしはふいに、母とその友達と話している部屋にはいつて行つた。話は叔母のことだった。母は、叔母が喪に服さなかつたとか、あるいは、服したにしてももうやめてしまつたとかいつて憤慨していた。(じつさい、わたしにとっては、喪服を着たピュコランの叔母を想像することは、はでな着物を着た母を想像すると同じように不可能である) わたしたちの着いたその日は、わたしの記憶しているかぎりでは、リュシル・ピュコランはモスリシの衣装を着ていた。例によつて妥協的なミス・アシュバートンは、母をなだめようとつとめていた。彼女はあつたおらず論じていた。

「けっきょく、白だつて喪の色ですからね」

「では、あのひとが肩にかけている赤いショールも『喪の色』だとおっしゃるの？ わたし怒りますよ！」と、

母は叫んだ。

わたしが叔母に会うのは夏休みの間だけだった。わたしがいつも見かけたあの軽やかな、そして前のひろくはだけたコルサージュ（胸衣）姿は、あるいは夏の暑さのせいだったかも知からない。だが、わたしの母を憤慨させたのは、叔母が素肌の肩にかけていたショールのあの燃えるような色よりも、こうした抜きえり姿なのだった。

リュシル・ピュコランは非常な美人だった。わたしの手もとにある小さな肖像は、当時の叔母の姿をわたしに示している。娘たちの姉ともまちがえられそうな若々しい姿、斜めに腰をかけ、いつもの癖で、左手でかしげた顔をささえ、小指を気取ったふうにくちびるの方に曲げている。目のあらいヘヤネットが、えり首に半ば乱れかかった縮れ髪の手をおさえている。コルサージュの切れ込んだところには、黒びろうどのゆるい首飾りの先に、イタリヤ・モザイクのメダイヨン（牌）が下がっている。大きくふんわり結んだびろうどの帯、あご紐でいすの背につり下げた、つばびろのしなやかな麦わら帽子など、すべてが彼女の姿をいっそうあどけなく見せている。右の手はたらしで、閉じた本を持っている。

叔母は植民地の生まれだった。両親を知らないか、あ

るいはごく幼いころ死に別れたらしい。のちに母から聞いたところでは、捨て子か孤児の身の上だったのを、当時まだ子供のなかった牧師のヴォーティエ夫妻が引き取り、やがて牧師夫妻も、マルティニックを去ることになったので、彼女を連れて、ピュコラン一家が定住していたル・アーヴルにやってきたのだった。ヴォーティエ一家とピュコラン一家は交際をはじめた。叔父はそのころ外国のさる銀行に勤めていたが、三年後に家に帰ってきた時はじめて、若いリュシルに会ったのだった。叔父は彼女に夢中になり、すぐさま結婚を申し込んで、両親やわたしの母をひどく悲しませた。リュシルは当時十六だった。それまでに、ヴォーティエ夫人には二人の子供ができていた。夫人は子供たちのために、一月ごとに性質が妙にひねくれてゆくこの養女の影響をおそれはじめていた。それに、暮らしも楽ではなかったし……こうしたことが、母がわたしに、ヴォーティエ一家がなぜ彼女の弟の申し出をよるこんで受け入れたかを説明してくれたときの理由だった。それに、わたしの想像では、若いリュシルがようやく、一家の頭痛の種になりはじめていたのではないだろうか。ル・アーヴルの社会をよく知っているわたしには、男の心をそそらないではおかしいようなこうした少女を人々がどんなふうにあしらったかはたや

すく想像できる。これはのちに知ったことだが、ヴォーティエ牧師という人は、おだやかな、用心深いくせにばかり正直な人がらで、陰謀にかかったらどうにも手も足も出ず、悪に対してはぜんぜん備えないという好人物だったので、まったくの窮地に追いこまれたにちがいない。ヴォーティエ夫人については何も言うことができない。夫人は、四番目の息子を生むと、産後の肥立ちが悪くて死んでしまった。その息子がほとんどわたしと同年配で、のちにわたしの友人となったのである……

リュシル・ピュコランは、わたしたちの生活にはほとんど加わらなかった。昼食のすんだあとでなければ自分の部屋からおりてこなかった。そしてすぐに、ソファかハンモックの上に横になり、夕方まで寝そべって、それからけだるそうに起き上がるのだった。叔母は時おり、ぬれてもない乾ききった顔の上に、さも汗ばむのをぬぐうかのようにハンケチをあてた。そのハンケチの薄く柔らかなこと、花の匂いというよりは果物の匂いがすること、にわたしはびっくりした。また時に、帯の間から、ほかのいろんなものといっしょに、時計の鎖に下げてある銀のすべり蓋ふたのついたごく小さな鏡を取り出した。そして、鏡をのぞきこみ、指をくちびるにあててちよつと

唾つばでぬらし、それで目じりをしめした。よく本を手にしてはいたが、それはほとんど常に閉ざされたままだった。本の間には、籠かご甲の紙切りナイフが挟んであった。だれかがそばに寄っても、叔母のまなざしは相変わらず夢みつつけていて、ふり向いて見ようともしなかった。しばしば、だらけたような、疲れたような手から、ソファのひじ掛けから、スカートのひだから、ハンケチ、本、何かの花、あるいは葉しおなどが床にすべり落ちた。ある日のこと、その本を拾ってみたら——これも幼き日の思い出の一つだが——それが詩だったのを見て、わたしは赤面した。

夜、夕食のあとでは、リュシル・ピュコランはわたしたち家族のテーブルには寄りつかないで、ピアノの前にすわり、ショパンのゆるいマズルカを気持ちよさそうに弾いていた。そして時おり、いきなり途中でよして、ぼんと一つたたいたままじっとしていることがあった……

わたしは叔母のそばにいと、異様な氣づまりを覚えた。一種の尊敬と恐怖のいりまじった、なんとなくおちつかない氣持ちだった。おそらく、心の奥底の本能が、彼女を警戒させたのだろう。それに、叔母がフロラ・アシュバートンとわたしの母を輕蔑していること、一方ミ

ス・アシュバートンは彼女をおそれ、母は彼女をきらっていることを、わたしは感づいていたのだった。

リュシル・ピュコランよ、わたしはこの上あなたをうらもうとは思わない。あなたが犯した数々のあやまちもしばらく忘れたいと思う。……少なくとも、怒りの気持ちをまぜないであなたについて語るようにつとめよう。

その夏のある日のこと——あるいはその翌年の夏のことだったかも知らない。なにしろ舞台の道具立てがいつも同じなので、時としてわたしの記憶は重なり合つてごっちゃになつてしまうのだ、——本をさがしに客間にはいつて行つた。するとそこに叔母がいた。わたしはすぐに出て行こうとした。と、いつもはわたしのことなど眼中にもおかないような叔母が、わたしを呼びとめた。「なぜそんなに急いで出て行くの？ ジェローム、あたしがこわいの？」

わたしは胸をどきどきさせながら、叔母に近づいた。むりに笑顔をつくつて、手をさし出した。叔母は片方の手でわたしの手を振り、もう一方の手でわたしのほおをなでた。

「まあ、お母さんたらずいぶん変てこな身なりをさせるのね、かわいいそうに！……」

その時わたしは、えりの広い一種の水兵服を着ていた。それを叔母はもみくちゃにしはじめた。

「水兵服のえりはもつとずつと開いているものよ！」叔母はシャツのボタンを一つ飛ばしながらそういつた。

——「ほら！ こうしたほうがいいでしょう！」——そういつて叔母は、例の小さな鏡を取り出し、わたしの顔を自分の顔に引き寄せ、わたしの首のまわりに裸の腕をまわして、その手をはだけたわたしのシャツの下に突っこんだ。くすぐったくはないかと笑いながらきいて、さらに奥の方へさし入れた。……わたしがいきなり飛び上がったので、水兵服が裂けた。わたしはまっ赤になつて、「まあ、このおばかさんたら！」と叔母が叫んでいる間に、逃げ出した。わたしは庭の奥にまでかけて行つた。そして、菜園の小さな天水桶にハンケチをひたし、額にあて、そしてほおや首や、叔母がさわったところを残らず洗つたり、こすつたりした。

ときどき、リュシル・ピュコランは《発作》をおこした。それはとつぜんはじまつて、家じゅうは大騒ぎとなつた。ミス・アシュバートンは、大急ぎで子供たちを連れ出し、気をまぎらしにかかった。だが、寢室か客間から聞こえてくるおそろしい叫び声を子供たちの耳に入れ

まいとしてもむりだった。叔父は気がいのようになった。叔父がタオルやオー・ド・コロニーやエーテルを取りに廊下を駆けて行く足音が聞こえた。夕方、叔母がまだ姿を見せない食卓に向かった叔父は、不安そうな、ふけた顔つきをしていた。

発作がどうやら落ちつく、リュシル・ビュコランは子供たちを自分のそばに呼んだ。少なくとも、ロベールとジュリエットを。だがアリスは決して呼ばれなかった。こうした悲しい日には、アリスは自分の部屋にこもっていた。そこへ、時おり、叔父が彼女に会いに行った。叔父はよく彼女と話をしたのだった。

叔母の発作は召使たちを非常におそれさせていた。ある晩、発作がとくにひどくて、わたしは母といっしょに、客間の出来事がわりあい聞こえない母の部屋に閉じこもっていたが、炊事女が廊下を、

「旦那さま、早くいらしてください、奥さまが息をお引き取りになります！」と叫びながら駆けて行くのが聞こえた。

叔父はアリスの部屋に行っていた。そこで母が叔父を呼びに行った。十五分ばかりして、二人が、わたしがいる部屋の開かれた窓の前を、それと気づかずに通って行ったとき、母の話し声がわたしの耳に聞こえてきた。

「はつきり言いましうか、あれはみんなお芝居よ」
——そして幾度も、言葉のつづりを切つては、「お——
し——ば——い」とくり返していた。

これは、休暇の終わりがらに起こったことだった。そしてわたしたちの喪の二年のちのことだった。その後、長いことわたしは叔母と会わなかった。だが、わたしたちの家庭をくつがえしたあの悲しい事件、また、その事件の解決のちよつと前に、わたしがこれまでリュシル・ビュコランにいだいていた複雑な、まだはつきりしていなかった感情をまったくの憎悪に変えさせたある事情を語るまえに、ここで従姉妹のことを話さねばなるまい。

アリス・ビュコランが美しいというようなことは、わたしにはまだわからなかった。単なる美とはちがった他の魅力によつて、わたしは彼女のそばに引きつけられ、引き止められていたのだった。なるほど、彼女は、母親によく似ていた。だが、彼女のまなざしの表情はぜんぜん違った種類のものだったので、二人が似ていることに気がついたのはずつとこのちのことだった。わたしには、ひとの顔の描写はどうも不得手だ。顔の輪郭がすつと逃げてしまい、目の色さえも忘れてしまう。ただ、その頃からすでにどこやらうれいをおびていた微笑と、大きな

輪をえがいて、目からおそろしく遠くはなれた眉毛の線だけが思い出される。こんな眉毛はどこでも見たことはない。……いや、ダンテの時代のフィレンツェの小さな彫像に見たことがある。子供のころのベアトリッチェも、これと同じような、大きく弧をえがいた眉毛を持っていたにちがいない。この眉毛は、彼女のまなざしに、またからだ全体に、不安な、だがそれでいて頼りきっているような、もの問いたげな表情——そうだ、情熱的に問いかけている表情を与えていた。彼女にあっては、すべてが、問いかけて、待ち設けだった……こうしたもの問いたげな様子がどうしてわたしの心をとらえ、わたしの一生を決定したかを、これから物語ろう。

ところで、ジュリエットのほうがもっと美しく見えるべきであつたかもしれない。よろこびと健康が彼女の上で輝いていた。だが、彼女の美しさは、姉の優美さにくらべると、なんとなく外面的に思われ、だれの目にもぼつとはいるもののように思われた。従弟のロベールはというと、べつにこれといった特徴はなかった。単に、わたしとほとんど同じ年の男の子というにすぎなかった。わたしはジュリエットや彼と遊んだ。そしてアリスとは話をした。彼女はほとんどわたしたちの遊びに加わらなかった。どんなに遠く過去にさかのぼってみても、いつ

もまじめで、やさしい微笑をうかべた、そしてなにかもの思いにふけっている彼女の姿が浮かぶだけである。

——わたしたちは何を話したのだろうか？ 子供二人になんの話ができるだろう？ そのうちそのことも語ってみよう。だが、まず、そして二度と叔母のことは語らないように、叔母に関したことをこで片づけてしまおう。

父が死んで二年のち、母とわたしは、復活祭の休暇を過ごしにル・アーヴルにやってきた。町にあるビュロン家はかなり手ぜまだだったので、わたしたちはそこには泊まらないで、もっと大きな家を持っている母の姉のところに着ちついた。めったにしか会う機会のない母の姉はランティエ伯母は、ずっと前からやもめ暮らしをつづけていた。その子供たちは、わたしよりずっと年上で、性質もまるで違っていたので、わずかに顔見知りという程度だった。ル・アーヴルで《ランティエ家》と呼ばれているその家は、町の中にはなく、《山》と呼ばれている町を見下ろす丘の中腹にあった。ビュロン一家は、商業区の近くに住んでいた。急な坂によって、両家の往復はかなり短い時間でできた。わたしは日に幾度となく、この坂を駆けおりたり、よじのぼったりしたものだ。その日、わたしは叔父の家でおひるをたべた。食後まもなく、叔父は外出した。わたしは叔父を事務所まで送

って行き、それから母をさがしにプランティエの家にのぼって行った。母は伯母といっしょに出かけて、夕食の時でなければ帰って来ないだろうということだった。そこですぐに、わたしは町へ下りて行った。町を自由に散歩できるなどということは、めったにないことだった。わたしは港に行った。海からの霧で港はもの悲しかった。わたしは、二時間波止場の上をさまよい歩いた。と、急に、今別れてきたばかりではあるが、アリスをふいに訪ねたい欲望がわいてきた……わたしはかけ足で町を横切り、ピュコラン家の戸口のベルをならした。そしてすでに階段に飛びかかっていた。と、戸をあけてくれた女中が、わたしを引き止めた。

「お上がりになってはいけませんよ、ジェロームさま！ いけませんよ。奥さまが発作を起こしてらっしゃいますから」

だがわたしはかまわずのぼって行った。叔母に会いに来たのではないのだ……アリスの部屋は四階にあった。二階には客間と食堂があった。三階に叔母の部屋があって、そこから話し声がにぎやかに聞こえていた。扉が開いていて、どうしてもその前を通らねばならない。一筋のあかりが部屋から射して、階段のペリエ(踊り場)を横

切っている。見つかつてはと思って、一瞬ためらい、身をかくした。そして、驚いたことには次のような場面を見たのだった。カーテンは、しめきつてあるが、二つの燭台のろうそくが楽しげな光をはなっている部屋のまん中に、叔母が長いすに寝そべっていた。その足もとに、ロベールとジュリエットがいた。叔母のうしろには、中尉の軍服をつけた、見知らぬ若い男がいた。——二人の子供がその場にいたということは、今日考えると、じつに言語道断なことと思われる。だが当時の無邪気なわたしは、むしろそれに安心させられたのだった。——二人は、女のような優しい声で次のようなことをくり返している見知らぬ男を、笑いながらながめていた。

「ピュコラン！ ピュコラン！……もしぼくが羊を持っていたら、きつとピュコランて名をつけますね」

叔母も大声あげて笑った。わたしは、叔母が巻きたばこを若い男の方にさし出すのを見た。男がそれに火をつけると、叔母は二、三服ふかした。巻きたばこが床に落ちた。男はそれを拾おうと飛び出し、肩掛けに足を取られたようなふうをして、叔母の前にひざまずいた。……こうしたこっけいな芝居のおかげで、わたしは見つけられることなしに、そこを通り抜けた。

今わたしは、アリサの部屋の扉の前にいる。一瞬待った。笑い声と高らかな話し声が下から聞こえてくる。おそらく、わたしのノックの音もそれに消されたのである。返事は聞こえてこなかった。わたしは扉を押した。

するとそれは音もなくあいた。部屋はすでに薄暗くなっていたので、アリサの姿はすぐには見分けられなかった。彼女は自分のベッドの枕もとにひざまずいて、日暮れの光の射しこんでくる窓に背を向けていた。わたしが近づいて行くと、彼女はふり向いた。が、べつに立ち上がろうとしなかった。彼女はつぶやいた。

「あらー ジェローム、なぜ帰ってきたの？」

わたしは接吻しようと身をかがめた。彼女の顔は濡れていた……

この瞬間がわたしの一生を決定した。今日でもこの時のことを思い出すと、胸が苦しくなる。もちろん、わたしには、アリサの悲しみの原因はごく不完全にしかわかっていなかった。だが、この悲しみは、激しく鼓動しているこの小さな魂にとっては、また、すすり泣きにうちふるえているこのかよい肉体にとっては、あまりにも強すぎるものであることを、わたしはひしひしと感じていたのだった。

わたしは、ひざまずいたままでいる彼女のそばに立っていた。はじめて心にわき起こったこの興奮を、わたしはどう表現していいかわからなかった。ただ、彼女の頭をわが胸に抱きしめ、わたしの魂がそこから流れ出てくるくちびるを、彼女の額に押し当てていた。愛と憐憫に、また感激、犠牲、徳行などのごっちゃにまじった感情に酔ったわたしは、全身の力をこめて神に訴え、わが一生の目的は、この少女を恐怖や不幸や生活からまもってやるほかにはないと考え、そのためにわが身をささげる気持ちになつていた。わたしはついに祈りの心に満たされて、そこにひざまずいた。わたしは彼女をかばうように胸に抱きしめた。その時、かすかに、彼女の声が耳に聞こえた。

「ジェローム！ あの人たちには見つからなかったわね？ さあ！ 早く行って！ 見つかるといけないから」

それから、さらに声をひそめて言った。

「ジェローム、だれにも言わないでね……お気の毒なお父さまは何もご存じないんだから……」

だから、わたしは母にも何も言わなかった。だが、ブランドイエ伯母と母の長いひそひそ話や、二人の意味あ

りげな、何か落ちつかぬ心配そうな様子、また、二人がないしょ話をしているそばに近寄るたびに「あっちへ行つて遊んでおいで！」と言われて追ひ払われることなど、すべてを思い合わせて、二人がビュコラン家の秘密をぜんぜん知らないわけではないことがわたしにはわかった。

わたしたちがバリに帰るのを追いかけるようにして一通の電報が届き、母がふたたびル・アーヴルに引き返した。叔母が家出したのだった。

「だれかといっしょになの？」とわたしは、母がわたしを預けて行ったミス・アシュバートンにきいた。

「それはお母さまにおききなさい。わたしには何もお答えできません」と、この事件にびっくり仰天したこの老嬢は言った。

それから二日して、ミス・アシュバートンとわたしは、母のあとを追つて出発した。その日は土曜日だった。翌日、教会で従姉妹たちに出会えるわけだ。そしてこのことだけで、わたしの頭はいっぱいだった。というのは、子供心に、そうしたところで会うことによつて、わたしたちの再会が浄められるのを、非常に重大なことに考えていたのだった。要するに、叔母のことなどほとんど気にかけていなかった。そして、母に何もきかないこ

とを誇りとした。

その朝、小さな礼拝堂には、あまり人はいなかった。ヴォーティエ牧師は、きつことさらにそうしたのだから、黙想のための引用句として、《力を尽くして狭き門より入れ》というキリストの言葉を選んだ。

アリサはわたしの二、三列前の席にいた。わたしのところからはその横顔が見えた。わたしはわれを忘れて彼女をじつと見つめていた。だから、一心に聴いていたこれらの言葉も、彼女を通して聞こえてくるように思われた。——叔父は母のそばに腰かけて、泣いていた。

牧師はまず全節を読んだ。「《力を尽くして狭き門より入れ。滅にいたる門は大きく、その路は広く、これより入る者おとし。生命にいたる門は狭く、その道は細く、これを見いだすもの少なし》」それから、主題をはっきり句切つて、まず広い道について語つた……わたしはぼんやりして、まるで夢でも見ているように、叔母の部屋を思い浮かべていた。寝そべって笑っている叔母の姿も浮かんでいた。……すると、笑いや喜びそのものが、けしからぬ、侮辱的なものになってきて、罪惡をいとわしくも誇張して表現したものに思われてくるのだった……「《これより入る者おとし》」とヴォーティエ牧師はつづ